

特集 豊臣秀吉と大田原



豊臣秀吉画像（佐賀県立名護屋城博物館蔵）

● 主な登場人物

<p>那須<small>なす</small> 資晴<small>すけはる</small></p>	<p>烏山城主。仮名は「太郎」で藤王丸の父。那須氏が改易された時の当主。豊臣秀吉に敵対した北条氏と懇意であった。</p>
<p>藤王丸<small>ふじおうまる</small> （那須<small>なす</small> 資景<small>すけかげ</small>）</p>	<p>那須資晴の嫡男<small>ちやくなん</small>で、那須氏が再興された時の当主。五歳の時、大田原城で秀吉に対面した。元服後の仮名は「与一」。</p>
<p>大田原<small>おたわら</small> 晴清<small>はるきよ</small></p>	<p>独立性が強い那須氏の配下の一人。大田原城主で、藤王丸を秀吉に謁見させた。ちなみに那須資晴は従甥<small>じゅうせい</small>（いとこの子ども）。</p>

● はじめに

突然ですが、この記事をご覧の皆さまに質問です。皆さまは、豊臣秀吉をご存じでしょうか。恐らく、ほとんどの方がご存じかと思えます。では、「秀吉は大田原に来たことがある」、ということはお存じでしたか。

今からちょうど四三〇年前、秀吉は大田原にやってきました。豊臣秀吉は有名ですが、大田原に来たという史実は、あまり知られていません。そこで今回の特集記事では、歴史上の有名な豊臣秀吉と大田原の関わりについて、特に那須地域の有力者、那須氏の動きを中心に紹介します。

今月の特集記事は、かなりマニアックな内容となっています。どうか読み飛ばさず、最後までお付き合いいただければと思います。

● 豊臣秀吉の小田原攻めと那須氏

天正十八年（一五九〇）三月、豊臣秀吉は天下統一の総仕上げとして、北条氏を攻めるために小田原へ出陣します。この際、秀吉は全国の大名らに小田原に参陣するよう求めました。この要求は、那須氏の当主・那須資晴のもとにも届きました。那須氏に任えていた大田原氏や大関氏、福原氏らは、那須資晴に小田原へ出陣し、豊臣秀吉に謁見（目上の人に会う）するように勧めます。しかし、北条氏と懇意（仲のよい間柄）の那須資晴は拒否しました。この那須資晴の対応に、大田原氏や大関氏、福原氏といった面々は業を煮やし、「このままでは我々の身が危ない」と感じます。そこで彼らは、那須資晴を置いて小田原に向かい、秀吉に謁見しました。秀吉は彼らの参陣を褒め、那須氏を除く大田原氏や大関氏、福原氏らの領知（土地を領有して支配す



▲ 小田原城

ること）を保証しました。しかし、それでも那須資晴は小田原に出陣せず、静観していました。結果的に、この那須資晴の選択は大失敗でした。

● 那須氏の改易と佐良土への蟄居



▲ 佐良土館跡
(市指定史跡)

天正十八年七月五日、北条氏は秀吉に降伏しました。そして、降伏後にはすぐに秀吉による戦後処理がはじまりました。小田原に参陣したものは領知を保証される一方で、小田原に参陣しなかったり、秀吉に味方しなかったりしたものは領知を没収されました。那須資晴も例外ではなく、室町時代から那須氏が一七〇年ほど本拠とした烏山城（現、那須烏山市城山）と六万石の領知を没収されました。一方で、秀吉に謁見した大田原氏や大関氏、福原氏らは領知を保証されました。

さて、烏山城を去った那須資晴は、佐良土で蟄居謹慎生活を送ります。江戸時代に書かれた『那須記』によると、那須資晴は父祖伝来の地・烏山城を追われた負い目や家来が離れていく様子を見るにつけ、心労で乱心したと言います。ちなみに、那須資晴が蟄居した場所は、佐良土多目的交流センター（旧湯津上村役場）の側にある「佐良土館跡」です。現在は、土塁が遺っています。

● 下野国（栃木県）に秀吉が到着

さて、北条氏を降伏させた秀吉は、七月十七日に戦後処理のため会津に向けて小田原を出発し、九日後の二十六日には宇都宮に到着しました。宇都宮で秀吉は、「宇都宮仕置」と呼ばれる戦後処理を行い、関東や奥州の大名の配置を決めたり、従わない大名を改易したりしました。秀吉は宇都宮に、八月四日まで滞在しました。



▲ 宇都宮城

●大田原に秀吉がやってきた

八月四日(新暦の九月二日頃)、秀吉は九泊十日滞在した宇都宮を出発し、会津に向かいます。そして氏家を経て、いよいよ大田原にやってきました。秀吉は、八月六日に白河に向かうまでの二日間、大田原に滞在しました。

宿泊場所は、大田原城(現在の龍城公園)とされています。ちなみに、あまり知られていませんが、秀吉が宿泊したと史料上確認できる場所は、県内では宇都宮と大田原の二か所だけです。

さて、大田原で秀吉は、大関氏や福原氏、芦野氏をはじめとする那須地域の有力者の謁見を受けたとされています。その中に、藤王丸という名前の五歳の子どもがいました。秀吉が「この子は誰だ?」と尋ねると、側にいた大田原城主・大田原晴清が「那須資晴の一子で藤王丸と申します。病気で参陣できない父・資晴に代わって秀吉様にご挨拶を参りました」と紹介しました。

秀吉は藤王丸の対面をとても喜び、所領を与えると約束したと言います。秀吉にとって、那須資晴は参陣しない不届き者であり、那須氏の再興など許したくなかったのかもしれない。しかし、五歳の子どもに挨拶をされた

ら敵わなかったのでしょう。いずれにせよ、この時那須氏の再興が約束されました。

ところでこの対面ですが、計画したのは大田原晴清であったと言われています。主家・那須氏の再興を目指す大田原晴清は、秀吉が大田原に来ることを知り、那須資晴を秀吉に対面させ、秀吉の勘気(怒り)を解こうとします。大田原晴清は、那須資晴に対する秀吉の印象が良くなれば、那須氏の再興を果たせると考えました。ところが、那須資晴は断りました。今更会いに行くのは恥ずかしく、武士の面目が立たない、というのが理由でした。

しかし大田原晴清は諦めず、那須資晴の嫡子・藤王丸(のちの那須資景)を秀吉に対面させてはどうかと提案します。この案を那須資晴も了承したため、五歳の藤王丸は父の代わりに秀吉に謁見することになりました。



▲大田原城跡(龍城公園)

●那須氏の再興と「与一」の末裔

こうして、改易からわずか三か月後の十月二十二日、藤王丸は秀吉から正式に所領を賜りました。石高は那須地域に五千石と、烏山城主時代の約十二分の一でしたが、再興を果たしました。さらに翌年四月には五千石を増され、合わせて一万石の大名となりました。ちなみに藤王丸の領地には、福原・蛭田・奥沢・鹿畑・倉骨・市野沢・湯津上・小船渡・須佐木・佐良土・下桜井(小滝)といった現在の大田原市域も含まれていました。

さて、こうして那須氏は再興されましたが、再興するにあたって「那須氏は普通の家柄ではない。あの有名な那須与一の子孫だ」ということがアピールされたと言われています。

那須与一とは、平安時代末期に扇の射落とした、あの与一です。那須氏は、自ら「あの有名な与一の末裔」だということを広くアピールし、「断絶させてはならない由緒ある名族だ」と訴え、生き残りを図りました。

そのため、藤王丸は天正十九年四月までに元服(成人)すると、従来の当主と同じ「太郎」を仮名として名乗るのではなく、「与一」を名乗り、藤王丸以降の当主も代々「与一」を名乗りました。

● 天正18年(1590)の関連年表

3月1日	秀吉、小田原に向けて京を出陣する。
3月下旬	大田原晴清、大関晴増らは秀吉に謁見する。
4月5日	秀吉、小田原城を包圍して北条氏を攻める。
5月15日	秀吉、那須資晴に書状を送り、小田原に参陣するよう求める。しかし、資晴は静観した。
7月5日	北条氏が秀吉に降伏する。
7月17日	戦後処理のため秀吉は小田原を出発した。
7月26日	秀吉、宇都宮に到着した。
7月下旬頃	那須資晴、烏山城を去り佐良土に向かう。
8月4日	秀吉、宇都宮を発ち大田原に着く。
秀吉は、8月6日(新暦の9月4日頃)まで大田原に滞在した。この時、藤王丸は大田原晴清とともに秀吉に謁見した。	
8月6日	秀吉、大田原を発ち白河に向かう。その途中、芦野で芦野氏の接待を受ける。
8月9日	秀吉、黒川(会津若松)に着く。
9月1日	8月12日頃黒川を出発した秀吉は京に戻る。
10月22日	秀吉、藤王丸に5,000石の領地を与える。藤王丸は、福原を本拠とした。
この後、翌天正19年(1591)の4月までに藤王丸は元服し、「与一」を名乗るようになる。また、天正19年(1591)4月に那須資景(藤王丸)は5,000石を加増され、石高は10,000石となる。	

とはいえこの頃、与一の存在はどの程度知られていたのでしょうか？ 戦国時代末期までに、与一の活躍を記した『平家物語』は既に流布していたと言われています。佐野の戦国武将・天徳寺宝行(佐野房綱)が、扇的に臨む与一の悲壮な覚悟を聞いて涙を流したという逸話もあります。そのため、当時の戦国武将の間で、那須与一は既に有名人であったと考えられます。那須氏の再興には、この名族アピールも功を奏したと考えられます。

● おわりに

与一の活躍と名声は、約四〇〇年後に子孫の存続の危機を救ったのでした。

今回は、大田原に豊臣秀吉が来てから四三〇年目を迎えることを記念して、特集記事を書かせていただきました。なお、本記事の内容を特集する展示会を、今秋当館で開催予定です。詳細は、秋頃の『広報おたわら』

TEL 問 那須与一伝承館
(20)0220

やホームページなどでお知らせします。

さて、その後那須氏は、那須資景(藤王丸)が慶長五年(一六〇〇)の関ヶ原の戦いで徳川家康に属し、大田原城で上杉景勝軍の襲来に備えました。また、大阪冬の陣・夏の陣にも出陣し、明暦二年(一六五六)に七十歳で七くなりしました。

また、那須資晴は那須資景の後見人として活躍し、晩年には徳川家康の御伽衆(特殊な経験や知識を持つ話し相手)となり、慶長十四年(一六〇九)に五十四歳で七くなりました。二人は玄性寺(大田原市福原)に葬られたと言われており、玄性寺には那須資景の墓碑が遺っています。また、法輪寺(大田原市佐良土)には那須資晴の墓所とされる五輪塔があります。そして、延宝九年(一六八一)、那須資晴から三代後の那須資弥の代に、那須氏は烏山に二万石の大名として復帰しました。改易から、九十一年後のことでした。